

ネパールでの支援活動実践とPBLとしての サービスラーニングの可能性

澤崎 敏文

(2017年12月27日受理)

Practice of Volunteer Activities in Nepal as Global Service-Learning and PBL

Toshifumi SAWAZAKI

要旨：これまで、学生がリアリティを持って学習できる環境構築のため、地元企業等と連携したPBL型の授業を実践してきたが、本稿はその発展形としてのサービスラーニング（奉仕活動等による学習）のあり方についての研究である。2017年2月にネパール山岳地域の小学校および周辺地域にて実施した本学学生の教育交流・ボランティア活動を対象に、PBLとしてのサービスラーニングのあり方と、そのプロジェクト設計のために活用可能なチェックリストの有効性の評価ならびに、学習成果等とその可能性について考察する。

Key words：サービスラーニング アクティブラーニング PBL 授業設計 授業実践

1. はじめに

ここ数年、本学で実施している学生意識調査の結果から、「将来の見通しが無い」との回答が増加傾向にある。これらは、本学だけに限った課題ではない。一般に、「基礎学力」「学習意欲」「将来への意欲」が低い最近の大学生に対して、主体的で深い学びを創発させるためには、職場や市民生活における「リアルな課題」に取り組みせ、プロセスの中で評価することが重要¹⁾ であると言われる。それらを解決するために、本学ではこれまでも学生がリアリティを持って学習できるようなプロジェクト・ベース・ラーニング（Project Based Learning。以下「PBL」という。）型授業の実践に継続的に取り組んでいるところである。特に、地元企業・行政機関等との連携によるPBL型授業の実践に力を注いでおり、これまでもショッピングモールなどの地元大型商業施設と連携・協力のもとでの演習型授業の実施、自治体との連携による定住・移住促進のためのパンフレットの企画・作成、JR福井駅前にある福井市観光物産館と連携した観光誘客ポスターの企

画・作成など多くを実践してきた。



図1 PBL型授業に取り組む学生

これら授業では、タブレットPCやLMS（Moodle）などを活用し、民間企業におけるナレッジマネジメントのモデルとしても知られるSECI²⁾を参考にした授業設計を行ってきた。

Socialization：グループによる討論

Externalization：企画書、計画書等の作成による
知識の表出化

Combination：表出化された知識の融合、
アイデアの発展
Internalization：実践による知識が内化・
暗黙知化（Learning by Doing）



図2 SECIモデル

これまでの研究課程から、アクティブラーニング、特にPBL型授業設計における課題としては、主に次の3点を挙げる事ができる³⁾。

- (1) プロジェクトの目的を学生が十分に理解し、自発的に行動できるような環境を整えること。
- (2) プロジェクトを教員側でデザインしすぎたり誘導したりしないこと（失敗等の経験をすることも重要であり失敗等の問題を自ら切り開くことで、自分たちの学びを実感するきっかけが生まれるため）
- (3) 学生自ら成し遂げたという達成感の醸成のためには、プロジェクトの成果が最終的に具体的な形となって表れることが望ましいこと

本研究は、これらの課題をさらに発展させ、学生自身による課題の発見・設定・定義、これまでの多分野にわたる教室内での学びの総合的な応用・実践、そして、地域社会への貢献と学生自身の達成感・自己効力感の向上を目指し、PBL型授業の発展形としてのサービスラーニング導入の可能性について、その授業デザインという側面からの実行可能性・継続的な制度化可能性を考察したものである。

なお、Bringleらによれば、サービスラーニングは以下のように定義されている⁴⁾。

Global service-learning is a course-based form of experiential education wherein students, faculty,

staff and institutions

- a. collaborate with diverse community stakeholders on an organized service activity to address real social problems and issues in the community,
- b. integrate classroom theory with active learning in the world,
- c. gain knowledge and skills related to the course content and advance civic, personal social development, and
- d. immerse themselves in another culture, experience daily reality in the host culture and engage in dual exchange of ideas with people from other countries.

(Bringle and Hatcher, 1995 ; Grusky, 2000 ; Kiely, 2005 ; University of Denver, 2006)

2. 活動の位置づけとプロジェクト設計

本学では、サービスラーニングを授業として、特に、PBL型授業としてどのように位置付けるかについての明確な基準や実践例がこれまでにない。加えて、日本国内においてもサービスラーニングを高等教育機関の授業カリキュラムに明確に位置付けて制度化している事例は少ない。

本研究におけるネパールでの海外支援活動プロジェクトは、学生が自主的に行う課外活動がきっかけであり、これらをサービスラーニングという形でどのように位置付けていくべきかについて、以下の3つのステップに分けて、それぞれの学習過程でどのような内容に取り組むべきかを踏まえながらプロジェクト設計を行った。

- (1) 準備段階（2016年9月～2017年1月末）
- (2) 実行段階（2017年2月15日出国～22日帰国）
- (3) 終了後の振り返り（2017年2月末～）

従来のPBL型授業と違い、サービスラーニングでは一般に、学生が教室で得た知識を地域社会において活用できるような貢献活動が望まれること、また、地域社会、学生（大学）双方に何らかのメリットが必要であると言われている。特に、今回

は海外での活動でもあり、各段階での取り組みには、ジョージア大学の国際サービ斯拉ーニングに関する調査報告書「A Survey of Best Practices of Global Service-Learning Programs in UGA (2009)」の「Essential Elements of Global Service-Learning (海外でサービ斯拉ーニングを実施するにあたって重要となる要素)」を参考に、それぞれの段階においてのプロジェクト設計のチェックリストとして活用を行った⁵⁾。

Essential Elements of Global Service-Learning

- ① Interdisciplinary
- ② Orientation to Local Culture
- ③ Engagement
- ④ Collaboration
- ⑤ Application of Knowledge
- ⑥ Satisfies a need defined by the community
- ⑦ Reflection of experiences
- ⑧ Sustainability
- ⑨ Flexibility and Variety

出典：A Survey of Best Practices of Global Service-Learning Programs in UGA (2009)

※後述するチェックリストとの対応のため便宜的に番号を振っているが、原著に番号はない。

また、本プロジェクト終了後は、本学の社会活動実践に関する単位制度を利用し、本活動が単位化できるような学内手続きを行うことで、授業と同等の評価ができるような環境を整えた。

3. ネパールでの支援活動の実践とその様子

本研究におけるネパールでのプロジェクトのきっかけは学生ら自身による提案である。著者自身の研究室では、このプロジェクト以前から、ネパールへの支援・交流活動に取り組んでおり、今回はその活動写真を見た学生らの申し出により、本プロジェクトの企画が実現した。ネパールは世界最高峰エベレストがあることでも知られ、多くの登山家はその頂を目指す。一方で、経済的には決して裕福とは言えない地域でもあり、GDP（国内総生産）は私たちが暮らす福井県の半分程度である⁶⁾。いわゆる先進国とは違い、現地での安全性、生活面での違い等も考慮する必要があり、それら準備に9月末から2月

15日出発までの約4か月半を要した。2016年9月末の学生の申し出から3月の振返り（報告書）までの流れは以下のとおりである。なお、本文中には後述するチェックリストに対応した活動のか所に①～⑨の番号を記している。

3.1 準備段階-Preparation

9月末に学生から支援活動の申し出があり、プロジェクト実現可能性について学生自身の意思確認も含めた話し合いを実施。その後、10月上旬に福井ネパール会、岐阜ネパール会を通じて、現地で長年支援活動を行っている筋田雅則氏に今回のプロジェクト内容について打診を行った。具体的には、現地ではどのような支援活動が求められており、日本から協力できること、学生でどこまで支援活動が可能であるか等の確認、調査を実施した（⑥ Satisfies a need defined by the community）。実際に支援活動を行った2月直前まで連絡を取り合い、現地の支援ニーズとのかい離がないような調整を行った。

11月下旬からは、海外でのサービ斯拉ーニングということもあり、普段なじみのないネパールの文化・風習、言葉や民族的な違い、政治や経済の状況についての学習活動を行った（② Orientation to Local Culture）。

現地での主な支援内容としては、支援物資を山岳地域の小学校に運搬、配布することであるが、それらに加えて、現地の小学校にて日本の文化、日本語に関する授業、交流会を行うことも計画された。そのため、12月上旬から、参加学生らが大学で学んだことを、今回の活動にどのように活かすことができるのか等を踏まえた支援内容について検討を行った（⑤ Application of Knowledge）。参加した学生はいずれも生活情報専攻所属の学生であり、ICT、コミュニケーション、ビジネス実務等を学んでいる。それぞれの得意分野を活かして、日本語学習や日本の文化を理解してもらうための教材作成を行った。

特に、教材作成に関しては、学校が山岳地域にあり、震災の影響もあることから、電源が必要となるパソコン等が不要かつ継続的に利用できるような教材作成を考案。また、出発直前の1月末には学生自

身でビザの事前仮申請をインターネットで実施した。



図3 事前学習会を行う学生たち

3.2 実行段階-Activities as Service

出発直前、日本の支援拠点（岐阜ネパール会）から支援物資が仁愛女子短期大学（福井県）に送付され、運搬物資の内容確認作業を実施した。その後、2月15日に出国して帰国した22日までの8日間についての活動は以下の通りである（③ Engagement/4. Collaboration）。

2月16日

ネパール到着後、カトマンズ西部の町サンガにある支援拠点「銀杏旅館」に移動。打ち合わせの後、支援物資の仕分け作業を実施。



図4 サンガの拠点での仕分け作業

2月17日

翌日、5時間かけて、サンガから今回の活動場所であるラムチェ村への移動。道中、事故等による道路の通行止め等にも見舞われ、予定よりも遅れて現

地に到着した。同日、支援先の小学校にて今回の支援の趣旨説明、支援物資の配布等を実施した。



図5 支援物資を配布する学生

2月18日

学校が休みであるため、ラムチェ村での交流活動を中心に行った。村の子供たちとの交流。翌日の授業での事前練習などを実施した。



図6 ラムチェ村での交流活動

2月19日

小学校での交流活動、日本語授業を実施。



図7 学生による授業の様子1

2月20日

再び、サンガの支援拠点に戻り、反省会（振り返り）の実施。

滞在中は、他の学生ボランティア団体メンバーとの交流もあり、また、現地での日程変更など、様々な変化に臨機応変に対応するなど、リアルな課題解決の機会に恵まれた（⑨ Flexibility and Variety）。



図8 学生による授業の様子2

3.3 振り返り—Reflection/Report

ネパールでの支援拠点での振り返りに加えて、帰国後、活動についての振り返りを実施（⑦ Reflection of Experiences）。参加したメンバー各自で報告書にまとめ、最終的に社会活動実践の単位申請を大学に行った。提出されたレポートの一部は以下のとおり。

振り返りのレポートより（一部抜粋）

Kさん

- ネパールのラムチェ村へ物資を運び、その村にある小学校で授業をすることが、今回のボランティアの目的でした。
- 本来の目的であるボランティア活動は、自分自身が活動の発信源にならなければならいものです。現地で準備してくださっていた方や同行してくださった先生を当てにし過ぎていたと反省しました。
- ネパールでボランティア活動をするために、経済や言語など調べられることは多く、もっと丁寧な準備ができたのではないかと、次回の課題になりました。
- 私はネパールに着くまで、未経験の場所であるこ

とに対して不安な気持ちを抱えていました。しかし、思っていたよりもネパールは安心のできる場所でした。

- その土地の雰囲気は調べて分かるものではないと思います。今回実際に私が足を運んで、学べたことのひとつになりました。さらに、ネパールを見て、個人でも来ることができるかもしれない次回への勇気にも変わりました。
- 私はネパールに着くまで、未経験の場所であることにに対して不安な気持ちを抱えていました。しかし、思っていたよりもネパールは安心のできる場所でした。

Mさん

- ボランティア等で社会に貢献できないか、自分の価値観を広げたいと思い、先生にネパールに行きたいという思いを伝え、こうして実現することができた。
- 授業が終わり教室を出ていくとき、私の名前を呼んで笑顔で「ありがとう」とたくさん言ってくれた。隣の教室が終わるのを待っていても、窓からのぞき込んで「ありがとう」と何回も何回も言ってくれ、私はここに来た意味があったと思うことができた。
- 新しい発見がたくさんあった。そして私たちの当たり前前は当たり前ではないことも思い知らされた。道が平らなことや、信号があること、トイレトーパーを流せること、お風呂があること、学校に行けること。改めて日本は不自由しない豊かな生活をしているのかがわかった。
- 日本に戻って、こんな豊かな生活をしていいのだろうかとも思った。だが、幸せの形が違うだけでありネパールの人たちは幸せなのだろうと感じた。

4. まとめ・今後の課題

3で説明されたプロジェクトの活動を、チェックリストとしての①～⑨の項目で以下のとおり整理した。

- ① Interdisciplinary：学際的事であること。様々な分野の知識や学びを活用して課題解決につなげていくことができているか。

この点に関しては、⑤番の項目とも関連する

が、今回のプログラムでは、事前準備から現地での活動に至るまで、大学での学びの応用にとどまらない幅広い知識が総合的に活用されており、十分に満たされていたと考える。

- ② Orientation to Local Culture：事前に訪問地等の文化・歴史・社会的背景について学習を行うこと。

この点に関しては、11月末からの事前勉強会、現地小学校での授業のための教材作成をとおして、これらを十分に学ぶ機会があったと考える。

- ③ Engagement：地域の方々との蜜なコミュニケーション、相互交流の実践

- ④ Collaboration：地域社会の方々（例：NPO、NGO、地元自治体、商工会議所、ビジネスリーダー、教育機関など）との協働

上記2つの項目に関しては、事前準備に加えて、現地での地域交流、現地の支援団体との協働などにより、十分満たされていたと考える。

- ⑤ Application of Knowledge：地域でのサービスをとおして、学びの応用（適用）

教材作成、小学校での授業の組み立て、実践をとおして、学生が大学の授業で学習したICTの活用、コミュニケーション手法などの内容が十分に生かされていたと考える。

- ⑥ Satisfies a need defined by the community：学生のために「つくられた」課題ではなく、その地域コミュニティが必要とする本当の課題への挑戦であること。

この点に関しては、事前準備の段階で、ネパール山岳地域特有の地域のニーズを把握し、地域住民の方々にメリットがあるような内容のプロジェクトとして考慮しており、十分に満たされていたと考える。

- ⑦ Reflection of experiences：経験・体験の内省（リフレクション）を行うこと。

プロジェクト終了後、現地ラムチェ村にて反省会を実施。また、ネパールの支援拠点にても同様に反省会、改善点の検討などを行った。帰国後、学生はそれらを踏まえてレポートを作成しており、リフレクションという点でも十分に満たしていると考えられる。

- ⑧ Sustainability：継続的な活動であること。

今回のプロジェクトは試行的なものであり、継続性という意味では課題が残る。今後、このような国際ボランティアをサービスラーニングとして授業に位置付けることができれば、継続性の課題は解決できると考える。

- ⑨ Flexibility and Variety：緊急、不測の事態にも柔軟に対応することができること。

今回、現地での道路事情に加え、現地小学校の日程等の変更によるスケジュール変更、内容変更など多岐にわたり、それら変更に対しても柔軟に対応できるかどうかを試す機会を得た。また、他のボランティア団体との交流もあり、学生が想定していた範囲を超えて、様々な支援のあり方を学ぶ機会を得ることができたと考えられる。

上記チェックリストを踏まえ、今回のネパール支援活動のプロジェクトをとおして、サービスラーニングをPBL型授業として設計する際に浮かび上がった課題は次の3つである。

- (1) 学生の自主的・主体的な意思により実施されるための環境整備

従来のPBL型授業設計も同様であるが、主体的な学びを促す「環境」を作ることが重要であり、大学側から提供された「環境」になってしまうと、本来のサービスラーニングとしての意味が半減してしまう恐れがある。一方で、地域に対する奉仕活動（サービス）あつてのサービスラーニングであるため、その「環境」設定の諸条件について検討する余地がある。

- (2) 活動をサービスラーニングとして評価するための標準的な指標や基準の確立

サービスラーニングもラーニング（学習）である以上、学習効果や評価するための基準が必要となる。これらは、従来のPBL学習でも同様であるが、形成的評価のための基準だけでなく、学習者の自己効力感、地域からのフィードバックなども含めた総合的な評価基準などを検討する余地がある。

(3) 活動が継続的 (⑧ Sustainability) となるような仕組みづくり

サービスラーニングが地域に対する奉仕活動を伴う必要があることからの必然として、それら活動が一過性ではなく、継続的になされることが望ましい。特に、今回のような海外ボランティア活動を主とする場合、継続的でなければ地域の貢献に繋がりにくく、その効果も長期的な視点を踏まえないと評価が難しい。そういう観点からも、サービスラーニングを授業の一環として組み込むことは意義があり、その枠組みについても検討する余地がある。

今回は、授業デザインという視点で9つのポイントから構成されるチェックリストを活用することで、学生に効果的なサービスラーニングの環境が十分に提供できているかどうかということ判断することができた。今回同様、学生によるネパール支援活動を通じたサービスラーニングの試みは平成30年2月にも実施予定であり、今後は、明らかとなった課題や学習効果という観点について、事前インタビュー、事後インタビュー、自己効力感の変化等についての尺度を用いて検証を行う予定である。

引用文献

- 1) 澤崎敏文・田中洋一 (2014)『PBL型授業設計と企業参加型の授業実践』日本教育工学会第30回全国大会論文集, pp.757-758
- 2) 野中郁次郎・竹内弘高 (1996)『The Knowledge-Creating Company 知識創造企業』東洋経済新報社
- 3) 澤崎敏文 (2016)『地元企業等との連携によるPBL型授業設計とその実践』日本教育工学会第32回全国大会講演論文集, pp.163-164
- 4) Bringle and Hatcher, 1995; Grusky, 2000; Kiely, 2005; University of Denver, 2006
- 5) Deborah Gonzalez, A Survey of Best Practices of Global Service-Learning Programs in UGA, Office of Service-Learning, University of Georgia, pp10-11 (2009)
- 6) 澤崎敏文 (2017)『ネパールで学んだ地域活動実践の意義』SOCIUS No.11, pp1